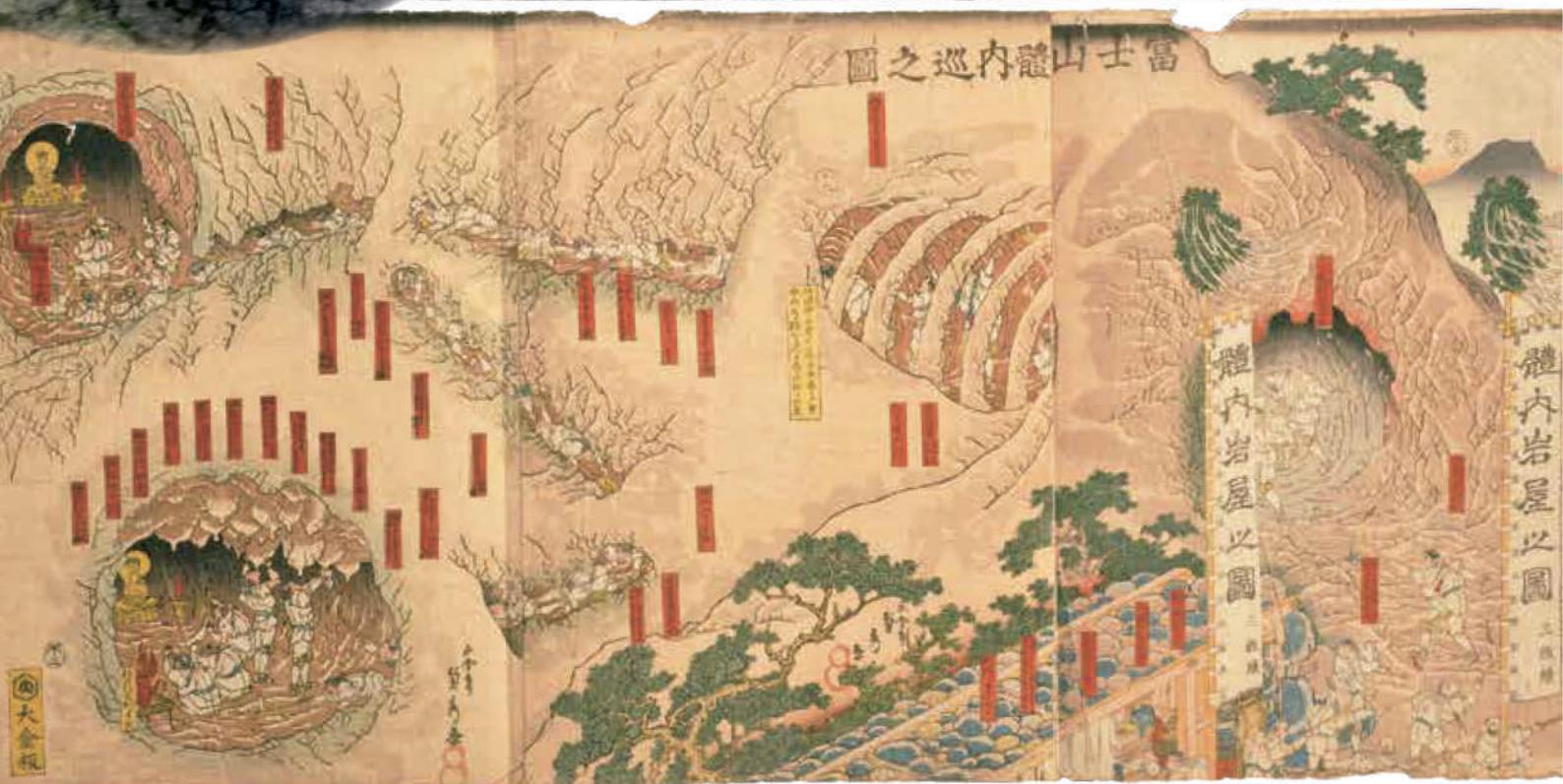


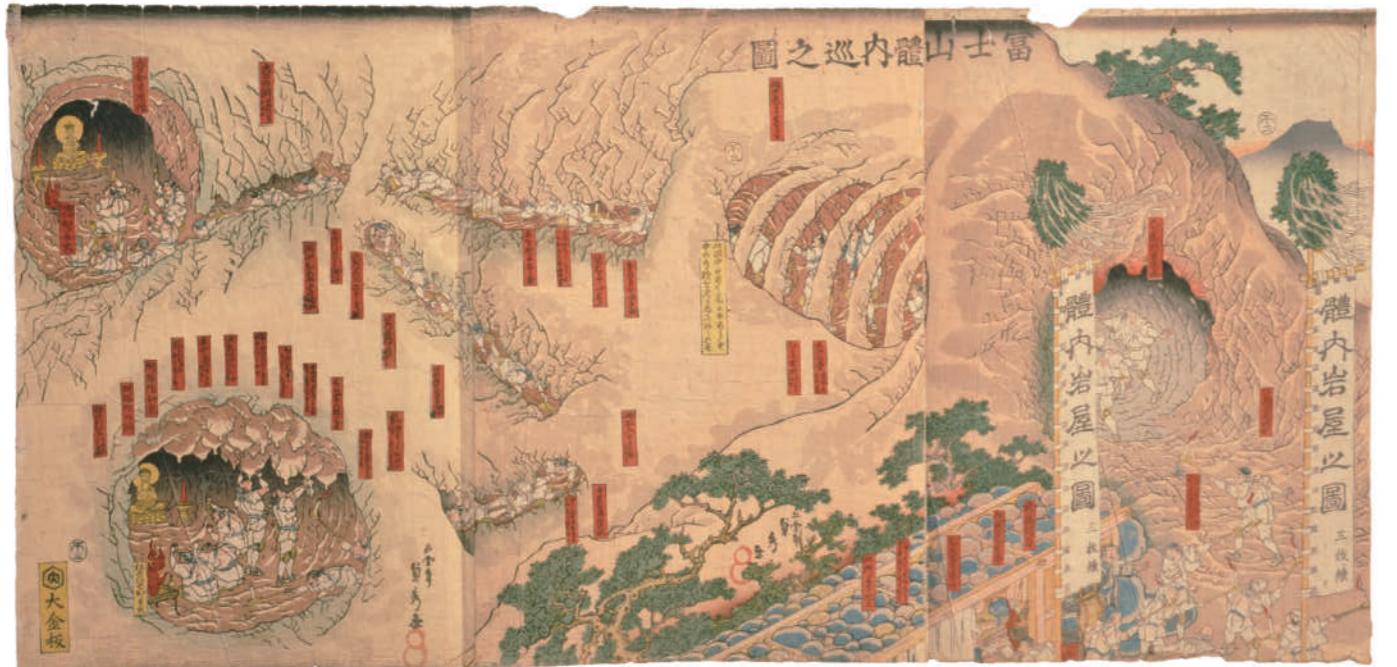
令和元年度 第二回企画展

溶岩洞穴をめぐる信仰



山梨県立富士山世界遺産センター

山麓に点在する溶岩洞穴



9五雲亭貞秀作「富士山體内巡之図」

安政5年（1858）

作者の五雲亭（歌川）貞秀は、鳥瞰的手法を得意としたことで知られる浮世絵師。狭い洞内を、膝に草鞋を装着した富士講道者が蠟燭を携え進む姿を描くなど、胎内潜（たいないくぐり）の実相を伝えている。万延元年（1860）の庚申縁年に合わせて刊行された「富士山道しるべ」にもよく似た挿絵が掲載されている。

小山町立図書館蔵（安田コレクション）

縦35.5cm×横73.7cm

当センターが事務局を務める山梨県富士山総合学術調査研究委員会では、世界遺産登録時にイコモス（国際記念物遺跡会議）より示された課題「下方斜面における巡礼路の特定」に取り組んでいます。近時は、北麓の登拝拠点である吉田（富士吉田市上吉田）から山頂へと延びる吉田口登山道、ならびに吉田と南西麓の人穴（静岡県富士宮市）とを結ぶ神野路（人穴道）に焦点をあて、調査活動を続けています。本年度上期企画展「富士山大鳥居」では、前者の成果の一部についてご覧いただきましたが、今回の企画展におきましては、後者の一端を報告したいと思います。

神野路の沿道には、江戸時代後期（19世紀）以降に造立された石造物が立っています。道標に混じって富士講中のひとつ【山臣講】の信仰を跡づける富士講碑が散見されます。周辺資料の調査を通じて、【山臣講】は青木ヶ原樹海内の精進穴（精進御穴、富士河口湖町精進）や氷池（鳴沢村）と呼ばれる側火山の火口を修行の場としたことがわかつきました。

この精進穴の信仰に先行するとみられるのが、船津胎内のそれです。その周囲に立つ石造物は、ここが18世紀の後半、安永年間（1772～81）頃には、信仰の場となっていたことを伝えています。しかし、そこにおける宗教的な活動が、いつ、誰によって創始されたかといった点については、まだまだはっきりしません。北麓の溶岩洞穴を舞台に展開した信仰について研究を深めるため、これまでの調査でわかった事象と今後の課題とを整理しておく必要があると考えました。はなはだ不十分な展示ならびに小冊子ではあります、多くのご意見を頂戴できれば幸甚です。

令和2年（2020）1月

山梨県立富士山世界遺産センター



信仰の対象となった富士山麓の溶岩洞穴

富士山の山麓には、その火山活動により噴出した溶岩が生成した洞穴が点在している。北麓では鳴沢溶岩樹型をはじめ計12カ所が、昭和4年（1929）から同7年にかけて、相次いで国の天然記念物に指定された（鳴沢溶岩樹型は、昭和27年に特別天然記念物に指定）。このうち、貞觀6年（864）の〔貞觀の大噴火〕にともなう青木ヶ原溶岩流が作った龍宮洞穴（龍宮、富士河口湖町）や、承平7年（937）の噴火（剣丸尾第一溶岩流）によるとされる船津胎内樹型（富士河口湖町）、吉田胎内樹型（富士吉田市）は、人びとの信仰の対象地となってきた。同じく信仰の地となった青木ヶ原樹海中の精進穴は、天然記念物の指定を受けていない。

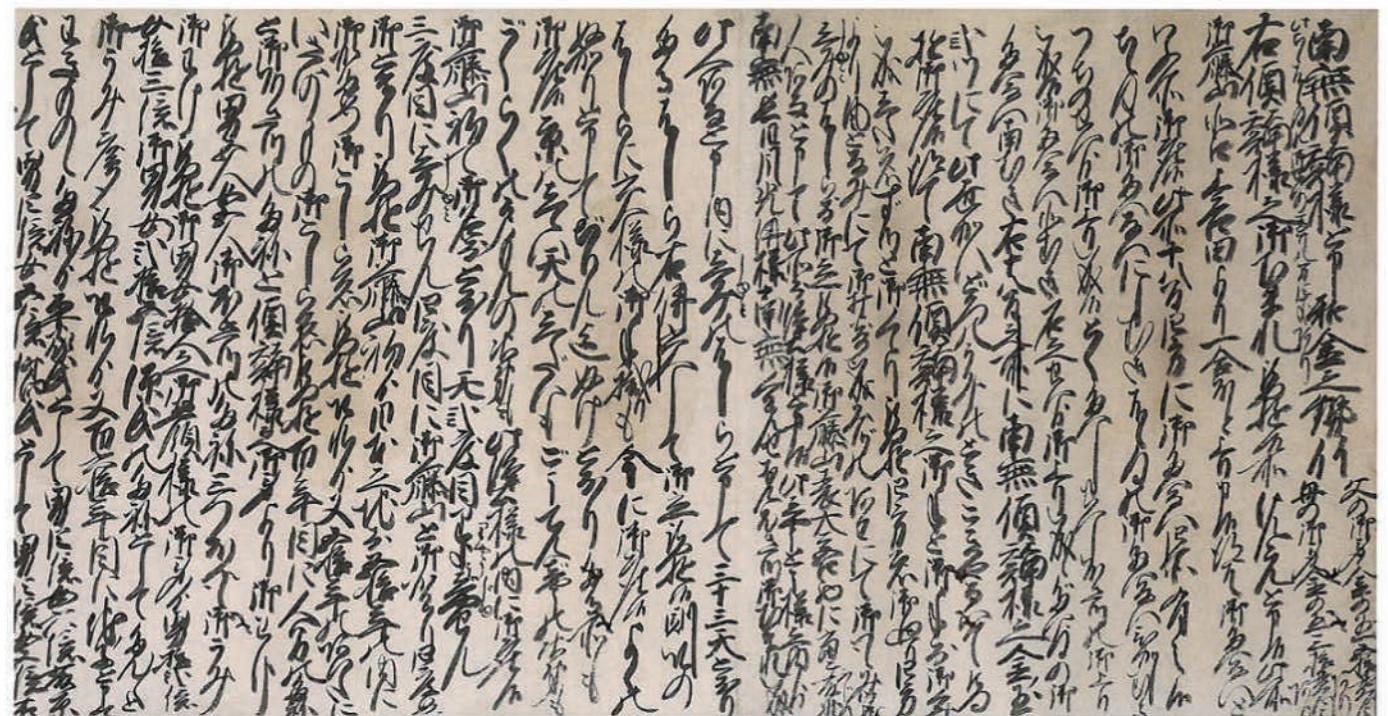
* 国土地理院発行20万分1地勢図「甲府」「静岡」（2012年）に加筆。

北面における 胎内信仰の起こり～船津胎内～

19世紀初頭に編纂された地誌「甲斐国志」は、「富士山」の項のなかで、「胎内穴」に言及し、「浅間明神出現ノ古跡」として信仰を集めていて、富士参詣の旅人は必ずこの洞穴に入っていると記述している(巻35)。「胎内穴」とは、剣丸尾と呼ばれる溶岩台地上に広がる国指定天然記念物・船津胎内樹型(富士河口湖町船津、指定地の広さは約8万平方メートル)のなかに点在する都合43の洞穴群のうちで最も大きなものを指し、現在では入口を覆うように無戸室浅間神社の社殿が建っている。

社殿の左方前面には7基(体)の石碑や石仏が立ち並ぶ。ひときわ巨大な富士講碑は、明治9年(1876)に丸藤講の「総講社」により造立された。碑の表面上部に、丸藤講の講祖高田藤四郎(行名を日行青山)が安永元年(1772)6月にこの洞穴を発見し、「胎内潛」と名づけたとの由緒を刻んでいる。一連の石造物のうち、最古の造立銘をもつのが大日如来坐像で、安永3年の奉納だから、同元年に藤四郎が胎内を〔発見〕したとの所説は、おおむね肯定されよう。

ここで18世紀中頃の成立とみられる「富士山神宮麓八海略絵図」(資料8として版木、裏表紙参照)の記載が問題となる。同図は、「胎内道」の延長に「胎内」と「新胎内」を併記する(7ページ写真参照)。やや下方に位置する「新胎内」が船津胎内樹型中の洞穴とみられることから、高田藤四郎が胎内を〔発見〕する以前に、すでに「胎内」と呼称される洞穴が存在したことは疑いない。先行する胎内については、瓢箪根野と呼ばれる地に所在した、村上光清の父七左衛門が発見した、といった伝承があるが、なお不明な点が多い。今後の研究課題としたい。



3食行身禄筆「一字不說之卷」

享保14年(1729)

右ページに掲げた明治9年(1876)造立の富士講碑銘文にしたがえば、高田藤四郎は師=食行身禄の教えと神のお告げに導かれて胎内を〔発見〕したという。その「教え」に該当する記載が見られる。3行目以下に「御藤山北口上吉田より一合ほど上り申候えは御たいないといふ所御座候……」とある。



1高田藤四郎立像

無戸室浅間神社
19世紀カ
木造、像高43.0cm

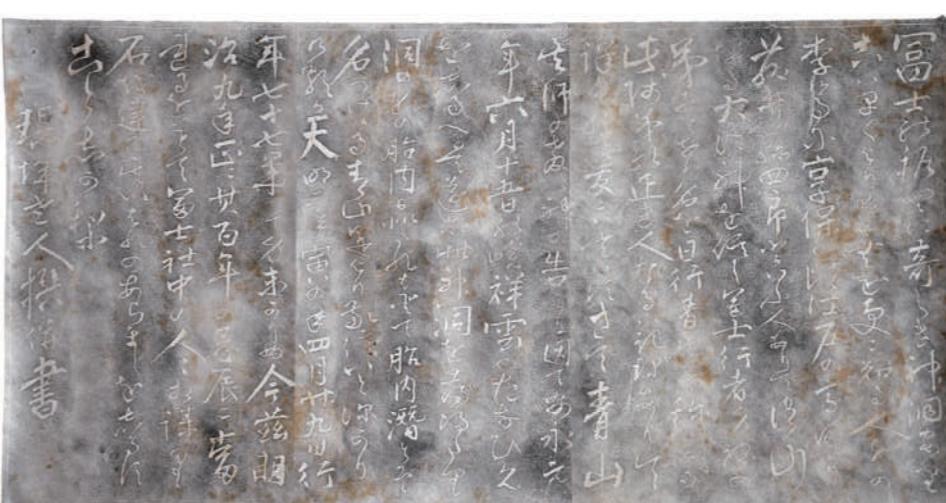


船津胎内の入口

無戸室浅間神社

上部に高田藤四郎立像が祀られるほか、周囲には富士講中に奉納したマネギ(招き)が下がる。

像を納める厨子右側の扉内側に「中興元祖 日行青山」の墨書銘が認められ、像主が藤四郎と判明する。ただし、像本体や厨子には紀年銘はなく、造立年は詳らかでない。藤四郎の組織した講中を丸藤講(まるとうこう)といい、「藤」の草書体を○で囲んだ図案を講印(こうじるし)に用いた。厨子の両扉(内側)ほかに講印の彫金が認められ、丸藤講の流れを汲む講中により、奉納された尊像であることは疑いない。



4富士講碑拓影(部分)

原碑造立：明治9年(1876)

丸藤講は、東京(江戸)市中はもとより、武藏国入間郡・高麗郡(埼玉県南部)に多くの枝講を派生させている。裏面に17段にわたって刻まれた姓名録から、実に800名以上の講員がこの碑の造立に奉加したことが判明する。



大日如来坐像
安永3年(1774)



像高112.0cm



原碑法量(塔身)：全高291.0cm×全幅156.7cm

↓ 大日如来坐像
(安永3年)

↓ 富士講碑
(明治9年)



無戸室浅間神社社殿前の石造物群

胎内に通じる道～胎内道(吉田道)～



6月畠(げつがん)筆〔御身抜〕

延宝8年(1680)

個人蔵
縦92.3cm×横37.8cm

長谷川角行から数えて4代目にあたる富士講行者月畠の筆になる。北面の信仰世界を図示する。右下の「船戸池」(船津池、河口湖)のやや上方に「胎内」(胎内)の記載がある。胎内を記す古い事例として貴重である。吉田町(上吉田中宿)の村上派の富士講講元の家系に伝來した。



*国土地理院発行2.5万分1地形図「富士吉田」(2015年)を南北逆転させたうえで加筆した。
村石真澄氏作図

〔船津胎内樹型〕という天然記念物の指定名称が示すように、胎内は船津村(富士河口湖町船津)の地内に所在した。しかし、18世紀の富士北麓を図化した「富士山神宮麓八海略絵図」には、船津の村落から通じる道は描かれていない(裏表紙参照)。時代を遡れば遡るほど、胎内への往来には、吉田(富士吉田市上吉田)の町が起点となっていた。幕末・万延元年(1860)の庚申縁年を期に版行された「富士山道しるべ」も、町の南端から分岐する「胎内道」を描く図葉を掲載し、さらに「胎内道」の項を立て、胎内について詳述するほか、同所へ通じる道について解説している。

登拝するには町の南端を東に折れ、浅間社を目指す必要があるが、胎内道は直進した。「道しるべ」は、この分岐を「追分」と呼んでいる。ここから3キロメートルほど南行したところで西大堀(宮川)を越え、船津胎内を目指し西へ向かった。追分の200メートルほど南方、胎内道沿いに諏訪内山神社が鎮座する。ここには、寛政12年(1800、庚申縁年)に江戸牛込(新宿区)の丸藤講により石造の狛犬一対が奉納されている。講祖高田藤四郎が開いた胎内の参道を莊厳したいとする講中の気持ちの表れと理解される。



8「富士山神宮麓八海略絵図」版木

18世紀後半力

個人蔵
縦40.5cm×横56.0cm×厚2.5cm



カリコヤ(仮小屋)跡

山梨県富士山科学研究所の構内に遺構が認められる。



「富士山神宮麓八海略絵図」

*裏表紙に全図を掲載。



「富士山真景之図」が収載する〔御胎内洞口〕の図(弘化4年[1847])

*『富士吉田市史』資料編5・近世Ⅲより転載

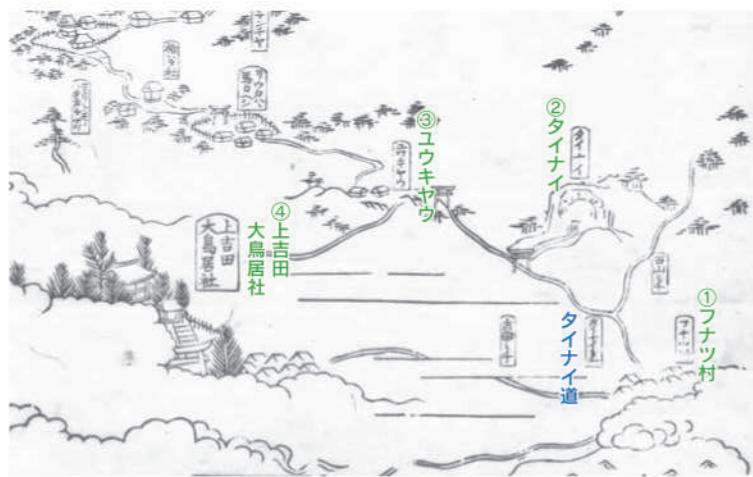
梯子伝いに西大堀西岸の断崖を登ると、カリコヤ(仮小屋)があった。軒端に櫻(たすき)が下がっているように見える。胎内潜(たいないくぐり)に必要な品を商っていたらしい。

新たな参詣路の誕生～船津道～

江戸時代、甲府盆地から御坂峠を越えて来訪した富士道者は、一年間にどのくらいの人数にのぼっただろうか？

こうした疑問に答えてくれる古文書が、御坂峠直下の御師集落川口村（富士河口湖町河口）に伝わっていた。山梨県立博物館の所蔵に帰した「本庄邦久家文書」（全105点）には、天保9年（1838）と同12年（1841）の両年に、それぞれ川口村経由で富士登拝を志した道者について詳細に記した帳簿2冊が含まれていた。ともにグループの代表者の名と在所、人数を書上げていて、12年には、総計355組、1,762人が川口村を通過していたことが判明した。あわせて、未記入の一部を除き、各グループがたどったルートさえ明らかとなった。グループごとに「胎内通り」「吉田通り」と注記するからだ。では、この二つの「通り」とは、どのような道筋だったのか？

天保8年、簿冊とほぼ時を同じくして書かれた絵図を見てみよう。河口湖南岸の6カ村を描いたもの（大嵐村・船津村〔ともに富士河口湖町〕の両村に各一舗が伝来、9ページに部分写真）、注記をともなわないのでわかりにくいか、船津から南行した道が二筋となって、胎内およびその南方で剣丸尾を横断、吉田口登山道に合流している。このうち胎内を通るルートが簿冊の記す「胎内通り」にあたるのだろう。文化年間（1804～18）に編纂された「甲斐国志」は、この道筋に言及していない。反対に幕末に描かれた図葉には、「舟津道」「川口通舟津道」といった記載が現れてくるから（7・9ページ写真参照）、19世紀に入って一般化したルートと考えてよい。川口から船津へ抜けた道者たちは、吉田を経由しない、バイパスを見出したのであった。



「富士山神系御山絵図」

19世紀後半（幕末～明治前半）

川口村の御師が頒布した木版印刷物。下部に川口を中心とした北面の信仰世界を図示している。①「フナツ村」（船津村）から②「タイナイ」（胎内）へ向かう道を描き、「タイナイ道」（胎内道）と注記している。胎内道は、③「ユウキヤウ」（遊興、現在の中ノ茶屋）まで伸び、ここで④「上吉田大島居社」（現在の北口本宮）から伸びる吉田口登山道に接続している。吉田から胎内へ至る道を省略するのは、川口御師の手による印刷物ゆえであろう。



個人蔵
縦67.5cm × 横27.0cm



大嵐村外六ヶ村絵図（部分）
天保8年（1837）

大嵐区蔵

船津村（黄）と入会場（緑）の境界に近い剣丸尾上に「胎内浅間」とある。これより上方にあったとおぼしき〔旧胎内〕（4ページ参照）にかかる記載はない。

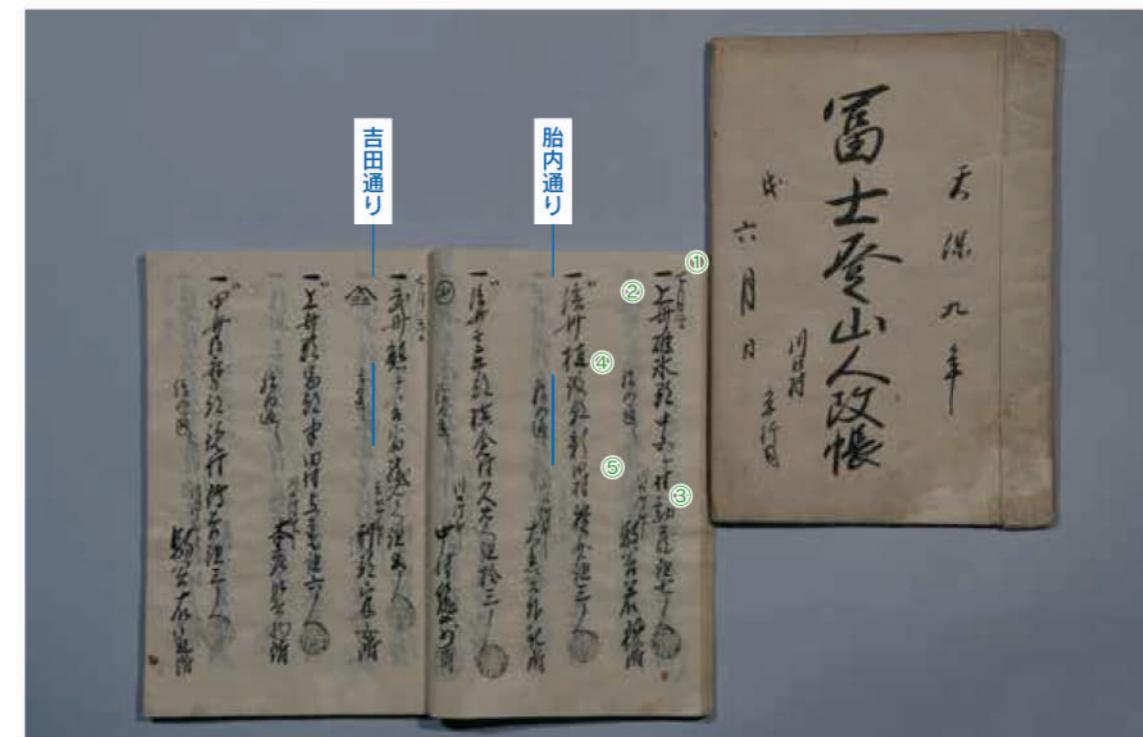


20「富士一山北口明細御絵図面」
嘉永3年（1850）写

父母御胎内

川口通
舟津道

個人蔵



天保9年「富士登山人改帳」（右上）と同12年「富士登山導者人別改帳」〔本庄邦久家文書〕

山梨県立博物館蔵

①日付（7月2日）、②在所（上州碓氷郡……）、③代表者（勘藏）+人数（7人）、④経由ルート（胎内経由）、⑤御師名（川口御師・駒谷若狭）の順で、川口村を通過した道者について詳細に記録している。

胎内信仰～胎内潜(くぐり)～

2ページに五雲亭貞秀が描いた「富士山體内巡之図」を掲げた。安政5年(1858)、江戸の版元大金(大黒屋金之助)による版行だから、吉田口登山道に沿う「胎内穴」(現船津胎内樹型のひとつ)について描いたものと考えてよい。ここに図示されている各場面は、①腹這いになって進まなければいけない部分がある、②乳房のような岩があって、そこから乳が出るように水が滴り落ちている、③大日如来を祀る空間がある、④肋骨に似た石皺が続くといった「甲斐国志」(19世紀初頭)以下、万延元年(1860)の「富士山道しるべ」に至る諸書の記述に対応している。道者たちは、表題通り「胎内穴」のなかを「巡」ったのであった。昭和5年(1930)に陸地測量部が「富士山近傍」の名で発行した「五万分一山岳図」にも「胎内潜」の記載があり、洞内を巡る行は近代まで続いたことが判明する。

なお、胎内潜を終えた道者に対してオマクリを振舞い、「(無事に生まれることができて)おめでとうございます」と声を掛けたという。オマクリとは、マクリ(海人草)のこと。新生児への初授乳を前に、「胎毒おろし」のためにマクリほかを煎じて飲ませる風習に倣ったものという。また、胎内は子安神として安産祈願の場となった。乳房状の岩から滴る水を晒や紙片で受け、それらを腹帶やお守としたのだった。



C



10「富士山明細図草稿」

19世紀中葉

吉田御師小澤寛信が吉田口登山道および山頂の要所要所を描いた画集に「富士山明細図」(彩色、全56構図)がある。同人の子孫宅に伝わった、これによく似た画集(墨書き、34構図)の一葉を掲げた。「明細図」は「父母御胎内」の表題を与えている。櫻掛けの道者2名が今にも洞内に潜ろうとしている。籠屋の左の間では釜を据えた竈で火が燃えさかっている。マクリを煎じているのだろう。右の間の軒端に架かるのは晒か。櫻や腹帶に用いた。「吉田道」を傘を差した女性2人が胎内へ向かっている。この2名の描写は「女人御来迎場」のカットまで続く。



「籠屋」部分



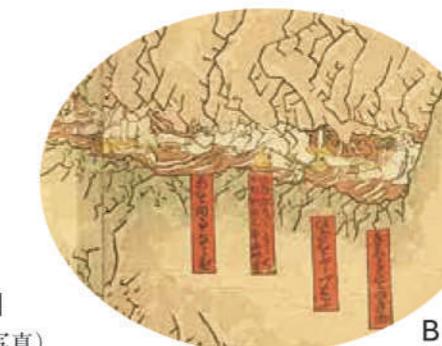
2銅製釜

無戸室浅間神社藏

大正10年(1921)

全高62.0cm、最大径49.0cm

船津胎内で、胎内潜(たいないくぐり)を終えた富士講社に提供するオマクリを煎じた釜。球胴の中央に羽がつく。肩や蓋の線刻銘から、山吉亀井講社(やまきちかめいこうしゃ)の奉納物であることが知られる。東京の下町、日本橋(現中央区)から外神田・東神田(現千代田区)一帯の金物商や銅職人が編成した講社である。



9五雲亭貞秀作「富士山體内巡之図」

(2ページに全図写真)

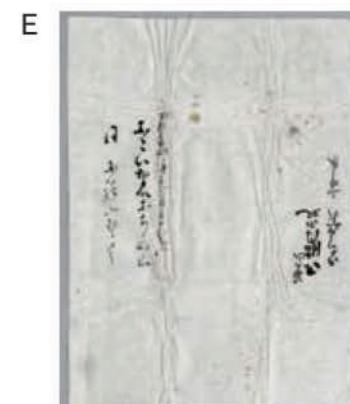
A10ページに掲げた「富士山明細図草稿」などによれば、「籠屋」(こもりや)は入口を覆うように建っていた。ここで、腹帶や膝草鞋、蠟燭など胎内潜に向け用具を整えたことを注記している。

B「大日の洞」へ向け匍匐する道者。膝草鞋(ひざわらじ)や燭台に灯した蠟燭が印象的だ。

C「阿弥陀の洞」では、オガミ(拝み)をあげる三名の手前で、二名の道者が乳房に見立てた溶岩から滴る水を頂戴している。手前の道者は乳(水滴)を腹帶で受けるべく手を伸ばす。



D



E



19船津胎内授「御胎内安産守」ほか〔大木家資料〕

19世紀

山梨県立博物館藏

D「御胎内安産守」には洗米10粒ほどが包まれている。「守」と墨書きされた紙は赤色の火山灰を包む。胎内で採取したものだろう。前者は船津胎内で授与されたもの、後者は胎内潜実施者が自身で包み持ち帰ったものかもしれない。

E右上の紙は、一度濡らしたのちに乾かしたものであることがわかる。包紙の注記は、嘉永4年(1851)7月20日に「登山」した折に「おたいないおちの水」を染み込ませたものであることを示す。船津胎内で乳に見立てた溶岩から滴る水を受けた紙片を持ち帰り、安産守としたのだろう。



14マクリ(海人草)

熱帶の海洋に広く分布するフジマツモ科の海藻。煎じて回虫や蟻虫(ぎょうちゅう)の駆除薬とした。このほか、甘草(かんぞう)・大黄(だいおう)を加えて、新生児の胎毒を下すのに用いた。

元祖食行身祿の御卷物之内

たい様御胎内 温行六知の御開之

日月 嘉永七年 泉源たい菩薩

寅七月拾五日



第16号溶岩樹型とNo.11石塔

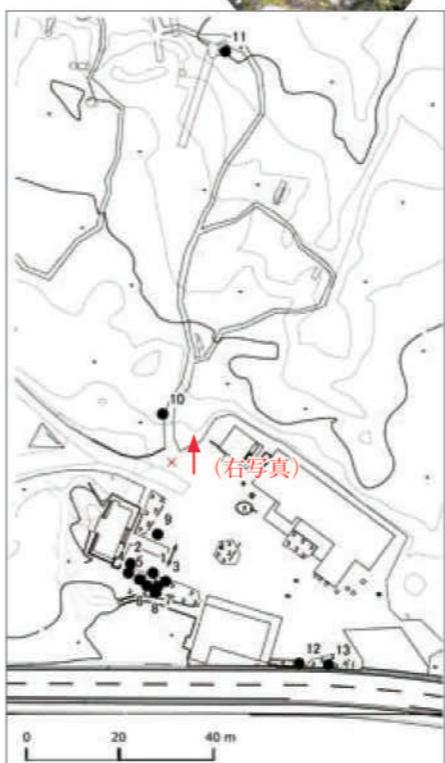
身祿は「だい様」の胎内を南向と説くが、この洞穴は北へ向け開口している。右にNo.11石塔正面の刻銘を翻刻した。下部に請行六知以下、都合9名が名を連ねる。いずれも「六口」の行名を名乗る。六知の弟子か。背面には、万延元年(1860)年6月3日付の造立銘があり、要行以下の計21名の名が刻まれている。

なお、左面には田辺伊賀をはじめとする吉田御師6名の名がある。



右地図Xの地点から北方を望む

No.10石塔右面の刻銘「泉源御胎内道」に導かれて進むと、第16号溶岩樹型およびNo.11石塔に到達する。



船津胎内樹型石造物分布図

村石眞澄氏作図



富士講碑拓影 (No.10石塔)

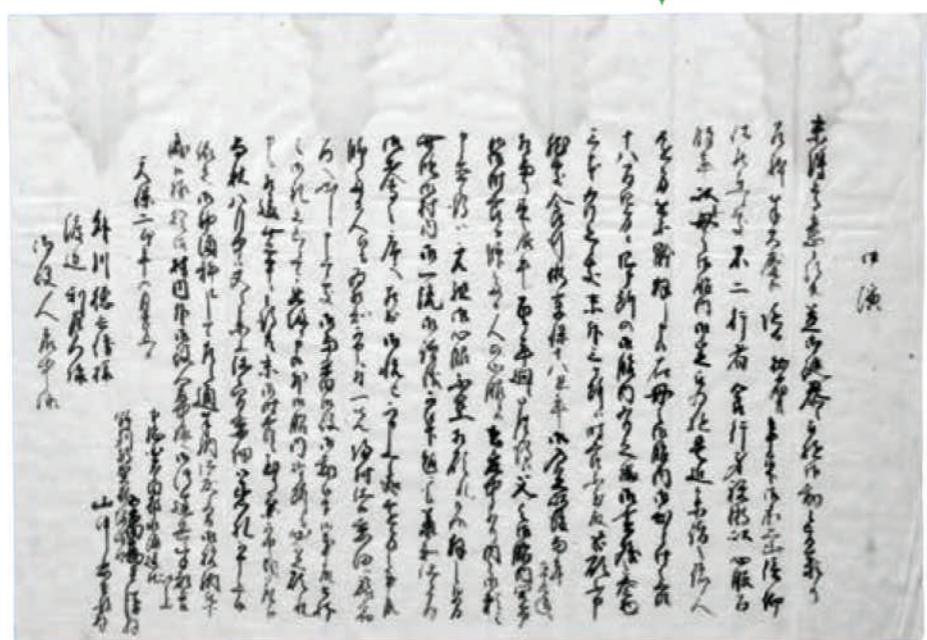
原碑造立：明治15年（1882）

正面には、三峰の富士山の下に、「日月」を○囲みした某講中の講印を重ね、「同行」「明治十年七月建之」と続いている。下部に「」を浮彫りするが、これは左面の「元之父様御胎内道」が延びる方向を指し示すものと考えられる。講印は〔丸明講〕あるいは〔日月講〕と解釈すべきか。後考を期したい。

〔新たな胎内〕の発見

〔船津胎内樹型〕の地内には、都合13基の石造物が認められる。無戸室浅間神社の社殿前に集中する9基のほか、4基が各所に散在している（13ページ分布図参照）。その一つが社殿の9基の北方約20メートルの地点に立つ道標である（No.10）。明治10年（1877）7月の建立で、三面に刻銘をもつ（13ページ下段参照）。これを字義どおり解釈すれば、温行六知の行名を称する富士講行者が、天保14年（1843）に「元之父様御胎内」へ続く道、嘉永7年（安政元、1854）には「泉源御胎内」へと通じる道を、それぞれ定めたことになる。右面下部には北方を指差す矢印があり、これにしたがって100メートルほど進むと、北に向いて開口する第16号溶岩樹型とその近傍に立つNo.11石塔に行き当たる。石塔には、「泉源たい菩薩」の6字のほか、この洞穴が食行身祿の卷物に登場する「たい様御胎内」にあたり、これを温行六知が嘉永7年7月15日に見出した旨が刻まれている。胎内に言及した身祿の卷物とは、「一字不説之卷」（資料3）にほかならない。そのなかで身祿は、18間四方（約33メートル四方）の内に、①父の胎内（西向）、②母の胎内（東向）、③勢至菩薩誕生の胎内（北向）、④「だい様」の胎内（南向）の4胎内が存在すると綴っていた。六知は、この記述に立返り、高田藤四郎が見つけ胎内潜の場として発展をみた②のほかに、①と④の特定を果たしたのであった。その事績を顕彰するため、六知所縁の講中によってこれらの石碑が建立されたものとみられる。もっとも、四つの胎内の発見を試みたのは、六知が初めてではなかった。すでに、天保2年に、下總国水海道村（茨城県常総市）、下野国塙崎村（栃木県小山市）に暮らす両名が、母の胎内以外の三つの胎内を見つけないと、活動を開始していた。翌3年が身祿の百回忌に当たることから、ぜひとも実現させたいと述べる書状が残っている（下段参照）。六知の在所は「二郷半領」（武藏国葛飾郡北部、江戸川右岸、現埼玉県南東部）と判明しているので（No.6石塔刻銘）、両名とは直接にはつながらない。ただ、天保年間（1830～44）に、胎内潜以外の胎内信仰を求める行者や講中が出現していたことは、記憶されるべきだろう。

十八間四方二四ヶ所の御胎内有之趣、御書残之卷物
三本有之候處、未外三ヶ所ハ時節不至故ニ哉顯不申、
然處食行尙保十八丑年御入定以後、當年九十九年二
候御時節と師たる人の心眼ニ而…
…右母之御胎内御ひらけ候節、
相当り、來辰年百ヶ年廻ニ御座候得ハ、父之御胎内開け



5五木田勘兵衛・中山安兵衛連署書状

天保2年（1831）6月25日

勘兵衛・安兵衛は「師たる人」（師匠）の眼に映ったとして、残す二ヶ所の発見も間違いないと綴っている。「師」は、いずれかの講中の先達とみられるが、はっきりしない。

個人蔵

縦28.1cm×横40.0cm

吉田胎内の開創

船津胎内樹型の南東約700メートルの地点に、吉田胎内樹型がある。名称の通り富士吉田市上吉田の地内に位置する。明治25年（1892）6月、埼玉県入間郡宗岡村（志木市宗岡）の丸藤宗岡講社の大先達星野勘藏（行名日行星山）が、船津胎内に代わる新たな胎内、信仰の場をこの地に見出したと説明されることが多い。たしかに、このとき建てられた石碑には「元祖胎内中興開基」と刻まれている。また、その造立には、埼玉県下4郡の諸村が奉加していた。

では、この時点ではなぜ新しい胎内が求められたのか？—— 明治23年8月、吉田の「富士信徒宿泊営業者」の団体（御師が中心）は、道者に対する山元での宿泊、また山内における休泊、強力や案内人・馬方の営業などに関わる規約（全11カ条）を定めた。規約はその後9カ条が「増補」されたが、その第4条以下で、団体の「事業」について言及している（『富士吉田市史』史料編7〔近・現代II〕富士信仰編No87）。第4条で「本胎内ヲ開穴シ、参拝者ヲ教誘スルコトヲ主務スルモノトシ」とし、続く第5条では、胎内における収益は、「歳司ノ基本財産」とするとしている。「歳司」とは、当該団体の代表者である。26年8月6日付で、「馬差」（乗馬業者）の一人が歳司に差出した「詫入申契約書」と題する誓約書が伝わっている。馬方は、船津胎内への馬の乗り入れを止めること、道者はすべて吉田胎内へ誘導することを誓約している（同No88）。先の規約に対する違反を咎められたのだろう。規約増補の年次は記されていないが、あるいは25年のことではなかったか。御師を中心とする吉田の宿泊営業者団体は、地元上吉田の地内に胎内がほしかったのだろう。こうした吉田の御師の姿勢に応じたのが、丸藤宗岡講社を主催する星野勘藏であり、埼玉県南部を拠点とする講社であった。宗岡講社と同様に高田藤四郎の流れを汲む講社は、東京都下に多数存在した。都下の講社の名を吉田胎内の石造物に見出すことができないのは、これらの信仰を吉田胎内が獲得しきることができなかつたことを物語っている。吉田胎内の「開穴」以後も、船津胎内が併存し続けたことは、右ページの「富士吉田口全図」などの記載からも裏付けられる。



「本穴」前の石造物群

船津胎内と同様、洞穴の入口前に石造物が並ぶ。最高所に立つ富士講碑が、星野勘藏（行名日行星山）による明治25年の「開基」を伝える。



胎内祭

本穴を管理する北口御師団が主催し、毎年4月29日に執行される。平成30年（2018）の祭事は、星野勘藏の子孫のほか、出身地である埼玉県志木市の皆さんも多数参列した。

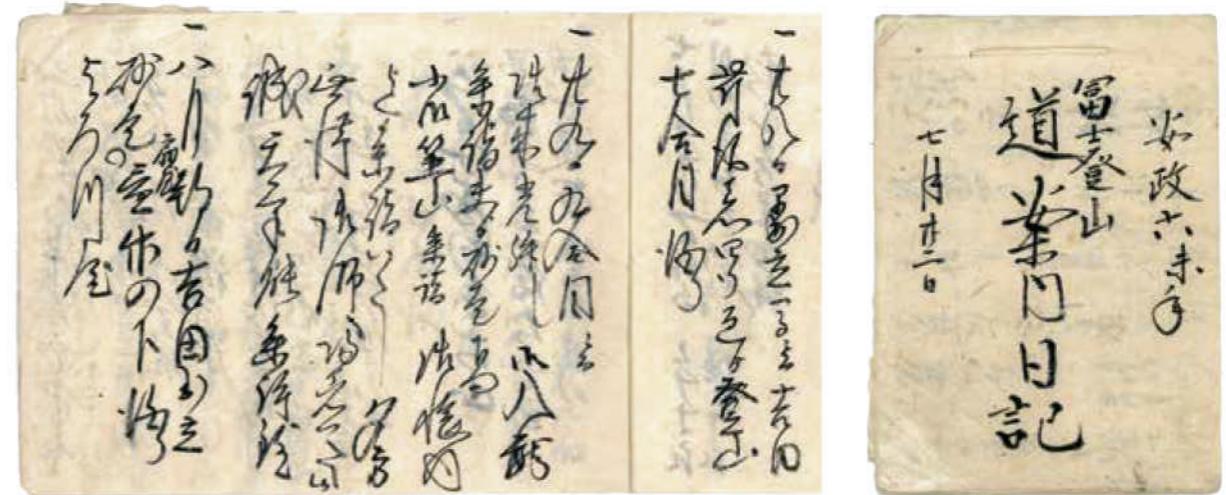


吉田胎内「本穴」

富士吉田市上吉田

吉田胎内樹型として約58,000平方メートルが国の天然記念物に指定されている。最も大きな洞穴を「本穴」という。一帯には、都合62にのぼる溶岩洞穴が分布する。東に開く入口から洞内に入り、10メートルほど進むと食行身禄を祀る石祠に行きあたる。さらに一段下り、右へ10メートル進む。ここから右左に延びる穴を、それぞれ父の胎内、母の胎内と呼ぶ。本穴への参道途上に籠屋（こもりや）の後身とみられる小屋がある。

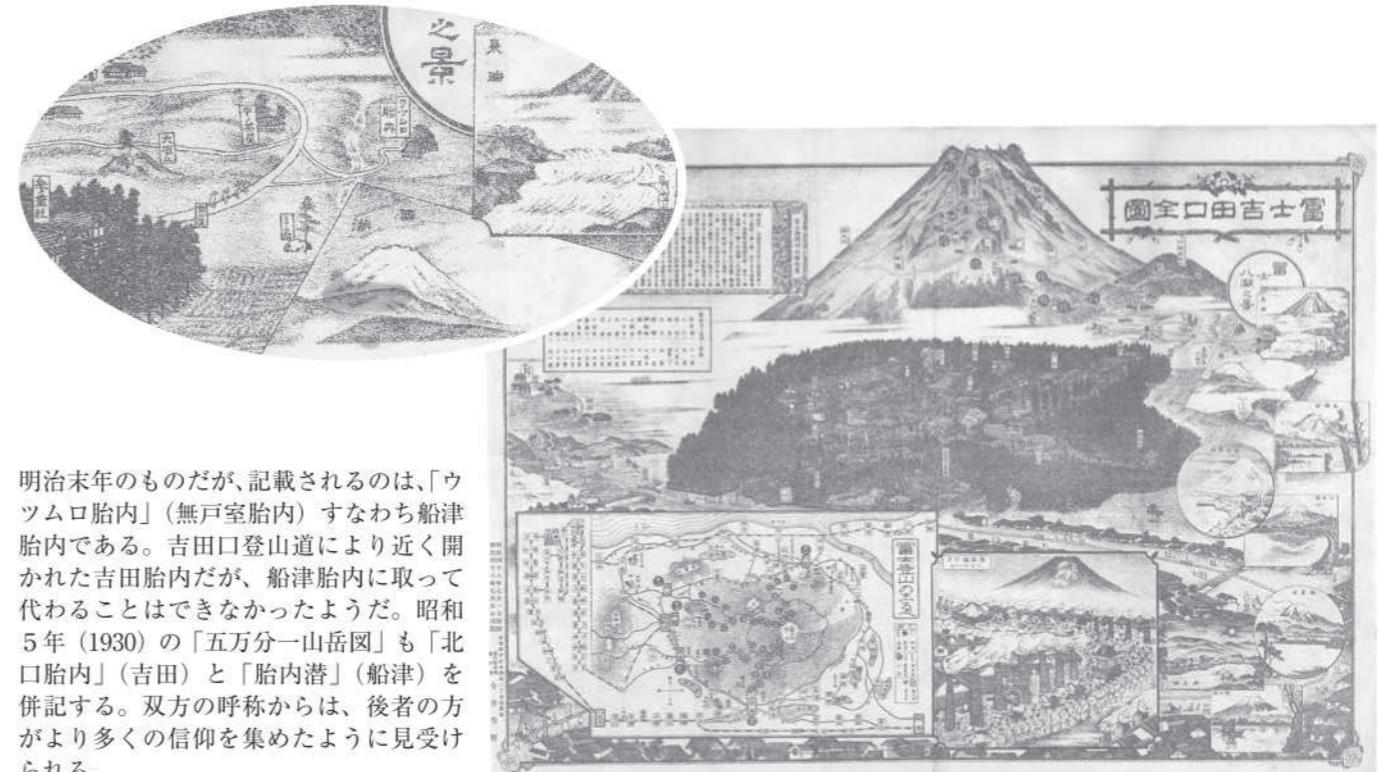
参詣順は定まっていなかった……？



11道中記「富士登山道案内日記」

個人蔵
安政6年（1859）

万延元年（1860）の庚申縁年に合わせて版行された「富士山道しるべ」は、「胎内道」の項を立て、胎内への参詣について詳細にガイドしている。北面の登拝拠点となる吉田に到着した道者には、①すぐさま胎内に参詣し、吉田の御師宅へ一泊、翌朝山頂を目指す、②山頂への途上に胎内へ寄る（胎内道経由）、③浅間社（現北口本宮）から登山道を進み、中ノ茶屋から胎内へ向かい、中ノ茶屋へとて返す、こうした様々な参詣方法があったと記述している。上掲の道中記を残した下野国都賀郡小野寺村（栃木市）の道者は、七合目に一泊、九合目で御来光を拝し、「御八龍参詣」（登頂）を果たすと、砂走を下山、小御嶽、胎内へ参詣したのち、御師宅（芹沢氏）へ帰着している。



「富士吉田口全図」
明治45年（1912）

当センター蔵
縦39.5cm×横54.5cm

精進穴の開創～誓行徳山の活動～

精進穴（精進御穴）と呼ばれる洞穴は、富士河口湖町精進地内、青木ヶ原樹海の深部に所在する。現在では、大正12年（1923）に整備された精進口登山道から道が通じているが、精進の本村からは南東方へ3.5キロメートルも隔たっている。こうした人里離れた洞穴に修行の場を求めたのが誓行徳山（俗名は門倉政四郎、安永3年〔1774〕生）である。幸いなことに、徳山については、事績を物語る史料に恵まれた。石造物や肖像彫刻だけでなく、文献資料もこと欠かない。在所の相州高座郡上溝村（相模原市中央区）やその周辺を檀家（得意先）とした吉田御師菊田式部（実名を広道）は、享和3年（1803）10月から天保6年（1835）閏7月に至る長大な日記を残していて（いわゆる「菊田日記」、全36冊）、そこには政四郎（徳山）の名が散見される。初出の文化元年（1804）6月29日の条には、「上溝村先達」の肩書で現れ、同人以下7名が富士山より下山、そのまま内八海巡に出たことなどが記述される。彼が先達を務めた「山臣講」の名も登場する。徳山は15歳で式部に師事したとされる。先の山臣講の名も、式部の行名である臣行徳恵にちなむという。もっとも、史料間の齟齬も少なくない。以下は、精進穴に立つ碑文（建立年未詳、精進村による造立、19ページ掲載の供養塔とは別碑）にしたがい徳山の事績を略述しておく。文政9年（1826）3月、鈴原（富士山一合目）において21日間の断食行を行うと、同年7月の御中道では大沢通過の前夜感得するところがあって精進穴へ来臨、170日間にわたる木食行を修した。次いで、28日間の断食行を修め、これの満了した文政10年7月13日を精進穴の「開穴」と定めた。徳山は、この後天保3年（1832）9月3日、精進穴に籠もって入定を遂げる。「開穴」から5年と2ヶ月。これは精進穴所在の同人供養塔が刻む「入窟二千日余成就景」ともそう矛盾しない（19ページ参照）。



精進穴（精進御穴）内部

100m余に達する横穴が南東方へ延びている。立ったまま進める箇所もあるが、這って進まないと最奥までは到達できない。洞内にも4基の石造物を確認した。これらについて、今後の調査を期したい。



精進穴（精進御穴）

富士河口湖町精進（青木ヶ原樹海内）



15誓行徳山坐像 精進穴祠堂安置（精進区蔵）

慶応元年（1865） 木造、像高39.0cm

合わせて伝わる銘札から、幕末慶応元年に、徳山の出身地相州上溝村（相模原市）の講中に造立されたことがわかる。表面には、徳山の師菊田広道（吉田御師、行名は臣行徳恵）の後裔菊田広一が徳山および精進穴の由緒を綴っている。



政四郎は、上溝地内に浅間神社の勧請を企図した。領主（旗本石野氏）や式部の理解、助力のもと、神社の建立にこぎつけると（柴之宮浅間宮）、白川家の門弟として神主の資格を得て、左仲と改名した。



（背銘）



（銘札）

表面

裏面

法量：総高9.3cm、肩高11.8cm、肩幅9.3cm、厚0.5cm



精進穴祠堂（乾徳道場）内部

須弥壇中央には、誓行徳山坐像を納めた厨子を安置する。向かって左に二世賢鏡（嘉永2年〔1849〕寂）の坐像、右には三世善明（安政2年〔1855〕寂）の位牌を、それぞれ祀る。



17

縦1.2m、横3.5mほどの穴が北西方を向いて開く。周囲に5基の石塔があるが、徳山の供養塔だけは、ほかの4基から離れて開口部を見下ろすように立っている。なお、この碑の塔身の拓影を19ページに掲げた。

精進穴祠堂（乾徳道場）

富士河口湖町精進（青木ヶ原樹海内）

精進穴に真向かうように、南面して建つ。近時まで日蓮宗の行者が住んでおり、西方に連続する二棟は、布教のための道場として拡張されたものとみられる。

徳山の継承者～二代賢鏡～

誓行徳山に続き、精進穴での信仰を主導したのが賢鏡である（嘉永2年〔1849〕5月3日寂）。七回忌に建てられた供養塔（精進穴所在）には、「二世賢鏡行者」と刻まれている。徳山の在所相模原市上溝では、徳山の三男であったと伝承されるが（大谷忠雄「南武藏・相模の行者たち」）、その真偽を含め、履歴にははつきりしない部分が多い。徳山は精進穴を「入宝窟」と呼んでいた。賢鏡は、これに代わって「九品浄土窟」の称を用いた。その名を大書した書幅が精進区に伝わる。増上寺64世の密賢の筆になるから、賢鏡も浄土宗の僧侶であった可能性が高い。賢鏡は、八坂村（身延町、旧八代郡、九一色郷の内）の今福孫右衛門の「御中道修行」を「引導」している。孫右衛門は大我講の行者だから（以上、精進穴所在嘉永元年造立富士講碑）、賢鏡は山臣講のみならず大我講の講中からも帰依を受けていたことになる。精進穴所在の供養塔建立時の奉加の状況を見ても、徳山の11地域98名に比して、22地域121名と増加している。安易な比較は慎むべきだろうが、徳山の跡を受け、精進穴の信仰を維持、発展させたであろうことは疑いない。下段で見るよう冰池の行場化も賢鏡の事績と考えてよいようだ。



▲密賢筆「九品清淨土窟」 精進区蔵

密賢は三縁山増上寺64世（在任：天保13年〔1842〕8月～弘化元年〔1844〕6月）。賢鏡の師であろうか。「賢」字は、これより授けられたものかもしれない。

やましんこう
ら（以上、精進穴所在嘉永元年造立富士講碑）、賢鏡は山臣講のみならず大我講の講中からも帰依を受けていたことになる。精進穴所在の供養塔建立時の奉加の状況を見ても、徳山の11地域98名に比して、22地域121名と増加している。安易な比較は慎むべきだろうが、徳山の跡を受け、精進穴の信仰を維持、発展させたであろうことは疑いない。下段で見るよう冰池の行場化も賢鏡の事績と考えてよいようだ。

氷池（こおりいけ）

富士山の北西麓には、青木ヶ原丸尾を生成した貞觀6年（864）の大噴火時のものとされる長尾山をはじめ、大小の噴火口が点在している。そのひとつに氷池がある。火口底の岩陰には、初夏でも残雪や氷が残り、霧が生ずることも多く趣深い。ここに弘化3年（1846）の造立銘をもつ石塔が立っている。賢鏡の主導のもと成沢村（鳴沢村）の人々が奉加して建立した「白大龍王」を祀る石碑である。左面にはこの年を期して、修行の場としたことを記す。直径、深さとも100メートル弱と、木立境（こだちざかい）の巡拝行の一地点として好適だったのかもしれない。なお、右面に「開山」として徳山の名を刻む。木立境の巡拝行を実践した徳山を慕い、いわば勧請開山としてその名を刻んだものだろう。



左面

正面

右面

奉開眼供養	弘化丙午六月十一日
賢鏡（花押）	建之
世話人中	成沢村



八臣 開山誓行徳山の 惣孝（講中）	甲州
----------------------	----

氷池（鳴沢村）

塔身：全高71.0cm×全幅26.5cm×奥行23.5cm

「氷池白太龍王」碑ならびに拓影

弘化3年（1846）



21賢鏡坐像

精進穴祠安置（精進区蔵）

年未詳

木造、像高30cm

誓行徳山像の左方隣に安置される。徳山像とは異なり、銘文や銘札をともなわないため、造立の経緯ははっきりしない。



天保12年（1841）6月「入寶窟誓行徳山の廟所奉加牒」〔精進区有文書〕

精進区蔵

奉加を募る趣意書部分を掲げた。「来ル辰年拾三年忌迄ニ出軒（出来）」するよう努めたいと述べる。下記の供養塔建立のためのものであったことがわかる。これに奉加を受けた者の名前の書上げが続くべきだが、いずれの帳簿も白紙が続く。下に見るように石塔の造立にこぎつけていることから、勧進は順調に進んだものとみられる。



17富士講碑（誓行徳山供養塔）拓影

原碑造立：天保15年（1844）

原碑法量（塔身）：全高29cm×全幅47cm×奥行25.5cm

賢鏡および精進村の発起により、徳山の十三回忌に合わせ、同人が主導した山臣講の「総同行」により建てられた。甲斐国内の8村ほか甲府や駿河国根原村（静岡県富士宮市）からの奉加もあった。二段の基礎には98名が名を連ねている。その7割弱にあたる67名が行名（ぎょうめい）を称している。旧上九一色村および旧下部町域はもとより、割石峠や富士川を越えて山臣講の教線が延びていたことが知られる。

青木ヶ原樹海内の道

青木ヶ原樹海は、貞觀の大噴火（貞觀6年〔864〕）が形成した溶岩台地上にできた森林帯である。その名が示すとおり、人の行き来を阻むかのように木々が生い茂る。そのなかを鳴沢（鳴沢村）と精進（富士河口湖町）をつなぐ小径が横断している。この道は、〔内八海廻〕と呼ばれた山麓の八つの精進場を廻る巡拝行にも利用された。

鳴沢へ向かう本道から精進穴（精進御穴）への道が分岐する地点には（21ページ地図の地点B）、精進穴二世賢鏡筆の名号を刻んだ石塔がある。左面には「道供養」の文字が認められ、同所の靈場化に努めた賢鏡の足跡の一端を伝えていく。

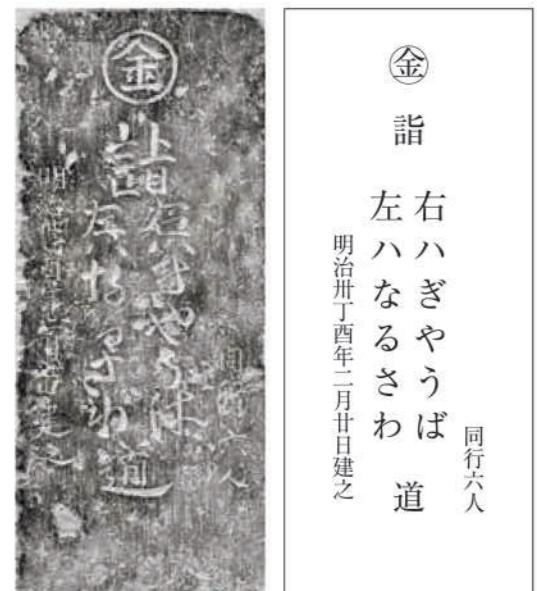


名号塔拓影

原碑所在：富士河口湖町精進（青木ヶ原樹海内）
原碑造立：天保15年（1844）

原碑法量：全高72.5cm×全幅20.5cm×奥行20.0cm
原碑所在：富士河口湖町精進（青木ヶ原樹海内）
原碑造立：天保15年（1844）

21ページ地図の地点Bに左掲の道標とともに立っていた。正面の名号右傍に刻まれた「九品淨土窟」は、精進穴を指す。この碑が道標の役割を担っていたことを示している。左面には「道供養」とある。賢鏡や山臣講中、地元「生司村」（精進村）、さらには西島村（身延町）の人びとの奉加によって、精進穴へ通じる道が整えられたことを物語る。なお建立日の天保15年6月3日は、精進穴開山誓行徳山の七回忌にあたる。賢鏡らの徳山思慕の想いの現れといえよう。



18道標拓影

原碑造立：明治30年（1897）

碑面上部中央に丸金講の講印を刻む。講社の名は、「金奈川」=神奈川（横浜市）を中心に展開したことに由来する。青木ヶ原樹海内に同講が造立した道標は、本碑を含め都合3基に及ぶ（21ページ地図の地点A～C）。繭や生糸を通じ、当方と横浜が強く結ばれていたことを示す遺物といえよう。



原碑所在：富士河口湖町精進（青木ヶ原樹海内）

原碑法量：全高65.0cm×全幅28.5cm×厚19.5cm



青木ヶ原周辺地図

*国土地理院発行2.5万分1地形図「河口湖西部」「鳴沢」「市川大門」「精進」（いずれも2015年）に加筆。

精進と鳴沢を結ぶ道が青木ヶ原樹海を横断する。A～Cの三ヵ所に明治30年（1897）に丸金講が造立した道標が立っている。

——大日照り、ウロ（洞）の水を禰宜殿下りて氷を置かれ申し候が、四五日溶けず、その日雨降る。
(読み下し)

戦国時代の富士北麓の諸事象を記録したことで著名な「勝山記」の一節である。永正元年（1504）年条に見えるが、この前後で元号と干支がずれているから、実は同2年のことだったのかもしれない。人びとが「大日照り」に苦しむなか、神主が氷を用いた儀式を執行した。効果はできめん、その日のうちに雨が降ったという。神主が執行したのは、雨乞の儀礼であったことは疑いない。「勝山記」は、河口湖南岸に所在する常在寺（富士河口湖町小立）に連なる僧侶が残した記録だから、河口湖沿岸で執行されたものと考えてよい。洞があった、（湖畔へ）降っていった、という記述から、その舞台は溶岩が露出する船津（同町）あたりではなかったか。

さて、西湖の南岸、青木ヶ原丸尾の北東端に所在するのが龍宮である。龍神=水の神を祀ったことから、この称がある。大正年間（1912～26）頃までは、日照が続くとこの穴から水を汲み上げ、雨乞の儀礼を行っていた。

雨乞の舞台。胎内潜とは異なる洞穴信仰的一面である。なお、毎年8月2日に祭事「西湖竜宮祭」が執行されている。写真は2019年の模様。



龍宮（龍宮洞穴）

胎内信仰の起源と広がり

以上、船津胎内および精進穴（精進御穴）にまつわる信仰について、企画展展示資料に即してまとめてみた。

火山活動が落ち着いた日本一の高山・富士山に修行の場を求めたのは修験たちであった。11世紀から12世紀ころのことと推察される。彼らが修行の拠点としたのは、山内に数多く存在した石洞や石窟である。13世紀、日蓮は吉田口五合五勺の経ヶ岳に法華經を埋納したという。さすがに後世の付会だろうが、そこが日蓮の系譜を引く行者たちの信仰の場であったことは疑いない。同所近くの姥ヶ懐は山腹にうがたれた天然の石窟である。降って延徳3年（1491）、同じく法華の僧侶日国は、鎌岩にいた者たちが、河口湖沿岸で起こった山崩れを目撃したと綴っている（「日国記」）。日国の朋輩が滞留していた七合目の鎌岩も修行の場だったのだろう。やがて、富士山における修行は、修験や僧侶といった宗教者から、広く一般の庶民にまで広がっていく。そうしたなか、^{じきぎょうみろく} 食行身禄をはじめとする富士行者たちは、自身の教えを広めるためにも、誰もが容易に修行できる場を山中ではなく人里近くに見出そうとしたのではなかろうか。身禄は、上吉田（富士吉田市）にほど近い地に浅間大菩薩出現の聖地＝胎内を想定した（資料3「一字不説之卷」）。身禄以前に「胎内」の存在を図示した月畠なども同じ気持ちだったのかもしれない（資料6〔御身抜〕）。彼ら以降発展をみた富士講は、^{おちょうじょう} 御頂上（^とはい）（登拝=登頂）だけでなく、諸所を巡る巡拝行を重視した。中腹を巡る御中渡（御中道）、山麓の精進場を辿る内八海巡、遠方の水場を巡る外八海巡、こういった巡拝を身禄があげた胎内（船津胎内と通称される洞穴）のなかに持ち込んだのが、弟子の一人高田藤四郎だった。胎内を巡って、再度地上に生まれ変わる。こうした信仰は、引き続き安産祈願へと発展していった。胎内信仰は一貫して富士講の信仰であり、宗教者のためのものではなく、一般庶民の信仰を集めて発展したのだった。

胎内信仰について、その起りをはじめ、その他諸事象について明らかにすることは、容易なことではないようだ。今後も諸資料の調査を継続していきたい。



経ヶ岳

その名称は、日蓮が文永6年（1269）に法華經を埋納したとの伝承に基づく。



富士山五合五勺

石窟の前面には覆屋（おおいや）が建つ。現在では日蓮像が祀られている。

姥ヶ懐

人穴に通じる道～神野路・人穴道～

「富士山神宮麓八海略絵図」（資料8）は、^{おおだわむら} 大田和村（鳴沢村枝村）を起点に人穴へ通じる「人穴道」を描いている。その成立より約半世紀早い享保14年（1729）、食行身禄は自著「一字不説之卷」（資料3）の冒頭で、船津胎内樹型一帯に比定される4カ所の胎内の存在について述べたあと（4・12ページ参照）、人穴（静岡県富士宮市）に言及して、富士山の西方に位置して、「お淨土様」と呼ぶと記している。「北口」の胎内と「表大宮口」の人穴とを対比したものといってよい。さらに先行する延宝8年（1680）の紀年銘をもつ月畠筆の〔御身抜〕（資料6）にも、「胎内」と「淨土門」＝「人穴」が描かれる。こちらにおける人穴の配置は、通常の地理感と大きく異なり違和感を禁じざるをえないが、胎内と人穴を同時に描く点は注目されてよい。こうした考え方によれば、月畠から村上光清へとつながる系譜、月行や身禄の系譜、どちらに連なる富士講も、人穴への巡拝を志すようになっていく。「八海略絵図」が「人穴道」＝神野路の起点とする大田和の辻に立つ道標は、文化13年（1816）の造立である。神野路上に「中之茶谷」と呼ばれる地点がある。ここに、大田和村の渡辺氏が建立した「富士仙元」と刻む石碑があるが、こちらは文化6年の造立である。19世紀初頭ころ、富士講中の胎内への参詣活動が活発化したと考えてよいだろう。



神野路の道標

右面に「右人穴」と大書されている。

16ページで見たように、文政10年（1827）7月に誓行徳山が精進穴（精進御穴）を「開く」と、続く賢鏡が天保年間から弘化年間（1844～48）にかけて、同所を拠点に山臣講の講中を教化し、御中道巡や内八海巡、木立境の巡拝行に励んだことが、鳴沢村や精進（富士河口湖町）地内の諸所に立つ富士講碑から判明する（18ページ参照）。同じころ、船津胎内では、身禄が存在すると説いた四カ所の胎内のうち、母の胎内（現在「船津胎内」と通称される洞穴）を除く父の胎内以下の三胎内を見つけようとする動きが生じ、二郷半領（埼玉県南東部）出身の六行温知の活動によって、天保14年7月に父の胎内が、嘉永7年（1854）7月には「だい様」の胎内が、それぞれ定められている。なお、同人が率いた講中は、「日月」の二字を丸囲みする講印を用いているが、その講名は詳らかでない。このほか、市川大門村（市川三郷町）の大寄友右衛門が主導した大我講の活動も活発で、天保14年に忍草村（忍野村）の八海（忍野八海）を「再開」した。同地が現在につながる行場としての地位を確立したのは、この時だろう。以上三講中の事例をあげたが、天保年間は、数多い富士講中が、それぞれ独自の信仰、行場を打ち出すようになった時代と位置づけることができそうだ。

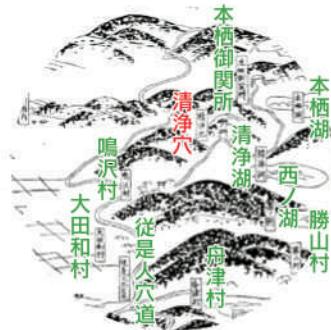


神野路に沿って立つ富士講碑

鳴沢村

水池東隣の弓射塚（ゆみいづか）の麓に所在する。山臣講の修行成就を記念して造立された。多くの銘文が刻まれるが、建立年は見えない。

天保年間（1830～44）の富士講



「富士山神宮麓八海略絵図」(8同版木) 個人蔵

18世紀後半力

版木：縦40.5cm×横56.0cm×厚2.5cm

18世紀代のものとみられる当図に、「清淨穴」の記載があることが注目される。誓山徳行が「清淨穴」(精進穴)を修行の場として見出したのは、文政10年(1827)のこと。徳山以前から精進穴は神聖視されていたとみられる。

企画展「溶岩洞穴をめぐる信仰」展示資料

No	資料名	年代	所蔵者	掲載頁
1	高田藤四郎立像 付厨子	19世紀力	無戸室浅間神社	5
2	銅製釜	大正10年(1921)	無戸室浅間神社	11
3	食行身禄筆「一字不説之巻」	享保14年(1729)	静岡県・富士山本宮浅間大社	4
4	富士講碑拓影(部分)	原碑:明治9年(1876)	原碑所在:無戸室浅間神社	5
5	五木田勘兵衛・山中安兵衛連署書状	天保2年(1831)	個人	12
6	月珀筆〔御身抜〕	延宝8年(1680)	個人	6
7	藤原(村上)光清筆〔御身抜〕	享保14年(1729)	個人	—
8	「富士山神宮麓八海略絵図」版木	18世紀後半力	個人	7・裏表紙
9	五雲亭貞秀作「富士山體内巡之図」	安政5年(1858)	静岡県・小山町立図書館	2
10	「富士山明細図草稿」	19世紀中葉	個人	10
11	道中記「富士登山道案内日記」	安政6年(1859)	個人	15
12	道中記「富士大山登山日記録」	明治10年(1877)	個人	—
13	神札「御胎内子安大神守護」	未詳	個人	—
14	マクリ(海人草)	現代	個人	11
15	誓行徳山坐像 付厨子(厨子は昭和45年[1960]造営)	慶応元年(1865)	精進区	17
16	善明上人位牌	未詳	精進区	17
17	富士講碑(誓行徳山供養塔)拓影	原碑:天保15年(1844)	原碑所在:精進穴	19
18	道標拓影	原碑:明治30年(1897)	原碑所在:富士河口湖町精進	20

パネルによる展示

19	船津胎内授与「御胎内安産守」ほか〔大木家資料〕	19世紀	山梨県立博物館	11
20	「富士一山北口明細御絵図面」	嘉永3年(1850)写	個人	9
21	賢鏡坐像	年末詳	精進区	17・19

山梨県立富士山世界遺産センター企画展

溶岩洞穴をめぐる信仰

協力者(順不同)

井出與五右衛門、伊藤昌光、大石良範、小佐野參朗、倉沢和彥、流石朝之、注連澤一仁、杉本悠樹、田辺 満、中村章彦、中村 力、藤井與三郎、村石眞澄、渡辺 武、渡辺 稔

無戸室浅間神社、小山町立図書館、河口湖フィールドセンター、北口本宮富士浅間神社、北口本宮富士浅間神社祭典世話掛、富士河口湖町教育委員会、富士河口湖町大嵐区、富士河口湖町精進区、富士河口湖町船津財産区、富士山本宮浅間大社、富士宮市教育委員会

本誌は企画展「溶岩洞穴をめぐる信仰」(令和2年1月1日～2月24日)の概要を紹介した展示解説である。実物展示以外の資料も含まれている。写真解説に付された数字は、展示資料の資料番号である。

執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ(堀内亨・堀内眞・根岸崇典)が担当した。

令和元年(2019)年12月23日発行
編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301

山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1

TEL 0555-72-2314

印 刷 株式会社 少國民社

〒400-0851

山梨県甲府市住吉1-13-1

TEL 055-226-2125